

岡崎市西牧野遺跡における ナイフ形石器について

● 社本有弥

岡崎市に所在する西牧野遺跡は県下有数の旧石器時代の包含層を持つ遺跡である。当センターと愛知県埋蔵文化財調査センターのそれぞれが調査を行い、旧石器時代遺物の出土を多数確認している。筆者は遺物の垂直分布から上下で石器群が別れる可能性について検討を行った。今回は上層、下層それぞれの石器群からナイフ形石器を抜き出し、その特徴について検討を行う。

1. はじめに

西牧野遺跡は岡崎市に所在する遺跡で、平成21年度に当センターが（酒井 2013）、平成22年度に愛知県埋蔵文化財調査センターが調査を行なっている（成瀬 2013）。確認された遺構・遺物の時代は旧石器時代から近世までと幅広く、長期間にわたって断続的に人が住んでいたことが確認されている。

2. 研究史概観

西牧野遺跡における旧石器時代の研究には、白石浩之氏の研究がある（白石 2017）。白石浩之氏は、遺物の分布をブロックとして区分し、石器組成や形態、石材といった観点から相違的な区分が可能であるか検討が行われた。石器集中地点である 09Cb 区と隣接する 09Cc 区では計5つのブロックに分けられること、時期は上層と下層で分けられることが指摘されている。そして、西牧野遺跡の編年的位置付けについて上層の石器群は岩宿Ⅱ並行期、下層の石器群を岩宿Ⅱ期より古く、始良 Tn 火山灰降灰以前の可能性があるとしている。

2022 年には筆者が 09Cb 区の遺物の垂直分布から検討を行い、上下に分布が集中する部分があることを指摘、白石氏の論考を追認する形となった（社本 2022）。

今回はナイフ形石器に焦点を当て、加工箇所、素材剥片の状態について検討し、上層・下層の石器群におけるナイフ形石器の特徴を明らかに

するものである。

3. 上層のナイフ形石器について

上層のナイフ形石器（図 1）は二側縁加工（1～7）、一側縁加工（8、9）、端部加工（10～14）、周縁加工（5、16）の 16 点がある。二側縁加工のナイフ形石器の中に切出形のものがある点は特筆される（5、6、7）。切出形のナイフ形石器はいわゆる岩宿Ⅱ期に代表される石器で、相模野編年の第Ⅲ期（諏訪間 2001）、静岡東部の休場層直下黒色帯（静岡考古学会 1995）と同時期と言える。

加工について見ていく。主に裏面から表面にかけて加工が施されているが、表面から加工を施しているものがある（2、4、6、7、11、16）。おそらく、最終的な調整のために行われたものと思われる。二側縁加工、一側縁加工ともに、右側縁に鋭利な縁辺を残して加工している。裏面基部への加工は切出形のナイフ形石器には見られるが、他のナイフ形石器には見られない。

ナイフ形石器の素材は縦長剥片と考えられるものが多く、周縁加工の 1 点のみが横長剥片素材となっている。素材剥片の打面の位置を見ると、7 割近くが打面を下位に置いて加工を施している。石材を見ると、加工部位などに関係なく黒曜石と凝灰岩はほぼ同数使われている。

4. 下層のナイフ形石器について

下層のナイフ形石器（図 2）は二側縁加工（1

～6)、一側縁加工(7～11)、端部加工(12)、周縁加工(13)の13点がある。切出形のナイフ形石器は見られないが、横長剥片を素材とするナイフ形石器があるため、相模野第Ⅱ期と第Ⅲ期の間、静岡東部の第Ⅰ黒色帯と同時期と考えられる。

加工は主に裏面から表面にかけて加工が施されているが、表面から加工を施しているものがある(3、8、9、11)。また二側縁加工、一側縁加工ともに、右側縁に鋭利な縁辺を残して加工が行われている。裏面基部への加工は二側縁加工の一部と端部加工に見られる。

ナイフ形石器の素材は、主に縦長剥片を素材としているが、二側縁加工と周縁加工に横長剥片を素材としているものもある。素材剥片の打面の位置を見ると、6割近くが打面を上位に置いて加工を施している。石材を見ると、加工部位などに関係なく黒曜石と凝灰岩はほぼ同数使われている。

5. 上下層のナイフ形石器の比較

ここからは上・下層のナイフ形石器について共通点、相違点について検討していく。

上・下層それぞれに二側縁、一側縁、端部、周縁加工のナイフ形石器がある点は共通している。明確な違いとしては、やはり切出形のナイフ形石器の有無であろう。

素材剥片に着目すると、上・下層ともに縦長

剥片を主体として利用していることがわかる。また横長剥片の打面を左に置いて加工している点についても共通している。だが、縦長剥片の利用形態に差があり、上層のナイフ形石器多くが打面の下位に置いて加工が施されているのに対し、下層のナイフ形石器は打面を上位に置いて加工を施している。石材利用についてはナイフ形石器においては上・下層で利用に違いは無いと言える。

6. まとめと今後の展望

今回は西牧野遺跡の上・下層のナイフ形石器文化について、その主であるナイフ形石器の形態や素材について検討を行なった。

基本的な組成や素材剥片の形、石材の割合というものは、ナイフ形石器において上・下層での差はほとんど無いことがわかる。これが西牧野遺跡特有のものなのかは、今後の検討課題としたい。

前回の検討では上層の石器群を岩宿Ⅱと同時期とし、下層の石器群を始良 Tn 火山灰降灰直後もしくはそれより古いとしていた。今回の検討を通して、上層の石器群の時期は変わらず、切出形のナイフ形石器が見られる相模野第Ⅲ期などと同時期と言えるが、下層の石器群については始良 Tn 火山灰降灰後の石器群として良いだろう。今後は石器群全体を通した検討を進めたい。

引用・参考文献

- 岐阜市教育委員会 1990 『椿洞遺跡』 岐阜市文化財報告
 酒井俊彦 2013 『西牧野遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第174集
 静岡県考古学会 1995 「愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年 予稿集」 静岡考古学会シンポジウムⅨ
 白石浩之 2017 「愛知県岡崎市西牧野遺跡の遺物分布から見たナイフ形石器文化の様相」 『東海石器研究 第7号』
 諏訪間順 2001 「相模野旧石器編年の到達点」 『神奈川考古学会 平成12年度 考古学講座』



図1 上層石器群のナイフ形石器 (縮尺 2/3)



図2 下層石器群のナイフ形石器 (縮尺 2/3)